



| | |
|--------------|---|
| Title | 安部公房作品の比較文学的研究 : ロブ＝グリエ、カ フカ、リルケ、オースターとの関係から |
| Author(s) | 梅津, 彰人 |
| Citation | |
| Issue Date | |
| Text Version | none |
| URL | http://hdl.handle.net/11094/49405 |
| DOI | |
| rights | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

本論文は主に安部公房の『燃えつきた地図』およびそれ以降の作品群を考察の対象とし、他の作家の作品との比較考察を行うことで作品の理解を深めるとともに、同時に晩年にいたるまでの作者安部の作家としてのあり方（創作の意図、問題意識、その方向性）の確認も行おうとするものである。全五章からなり、四百字詰めで換算して約650枚になる。

第1章の『燃えつきた地図』および『箱男』をめぐって——ロブ＝グリエとの関係から——は、それぞれの作と、ロブ＝グリエの『消しゴム』・『ニューヨーク革命計画』を対比し、即物的記述、主人公のいま・ここ性の表出、伝統的小説への反逆性・作者の消去による作品の自律の実現に共通点を見るとともに、安部は時代の流れ（都市化）に対応した新たな人間関係の模索・個人の自由の追求を進めると分析する。

第2章の『密会』および『方舟さくら丸』をめぐって——カフカとの関係から——では、先行研究の比較考察の対象が安部の初期作品に留まっているとし、『密会』と『城』の対比から、社会の嘘に対抗するための嘘（虚構）の有効性に賭ける安部と、孤独のなか「自己保存」のためには嘘（虚構）に頼らざるをえないと苦悩するカフカを指摘するとともに、両者の「書くこと」の不可能性と「書かないこと」の不可能性との間でのさまよいを浮かび上がらせる。

第3章の「初期作品群および『カンガルー・ノート』をめぐって——カフカおよびリルケとの関係から——」では、『終りし道の標べに』の旧版と新版の同質性から、単純にカフカから安部への影響とは言えないと指摘する。リルケと安部の関係については、先行研究でしばしば言われてきたように『名もなき夜のために』でもって途切れてしまうのではなく、その後の安部の作品の考察を進める上でリルケとの関係を考えることは有効であるとし、『カンガルー・ノート』にはリルケが再浮上したとする。

第4章『さまざまな父』をめぐってでは、晩年の安部の創作に対する姿勢を確かめ、作品で無名性の可能性を示したとしても、結局無名性は支配欲との無限循環に立ち戻ってしまうものであり、自身もその無限循環に加担してしまうほかはない、という安部の認識、さらには「仮説的リアリズム」（安部にとっての書くこと）がもはや無効であるという諦念までも見て取ることができるとする。

第5章「ポール・オースター *Travels in the Scriptorium* をめぐって」では、自分とは何か、他者との関係の構築は可能か、といった安部の一貫したテーマに今現在取り組み、なおかつ安部と同じく「書くこと」それ自体に意識的である作家としてポール・オースター文学の方向性を確認し、安部が最終的に『さまざまな父』において無効であるとみなすに至った、無名性を通しての創作に、オースターは（決して一方的に楽観視するわけではないが）いまなお可能性を見出しているとする。

論文審査の結果の要旨

安部公房とリルケ・カフカの関係が、先行研究とは異なり、初期段階に止まらず、後期の

【4】

| | |
|------------|---|
| 氏名 | 梅津彰人 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 第22427号 |
| 学位授与年月日 | 平成20年9月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻 |
| 学位論文名 | 安部公房作品の比較文学的研究—ロブ＝グリエ、カフカ、リルケ、オースターとの関係から— |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 出原 隆俊 (副査) 教授 中 直一 准教授 片淵 悦久 |

作品に至ってもその関連が指摘できることを明らかにした点は、大きな成果を上げたといえることができる。また、『終りし道の標べに』の旧版と新版の同質性の分析から、単純にカフカから安部への影響とは言えないとする指摘もきわめて重要である。さらに、従来注目されてこなかったロブ＝グリエを対比の対象として選んだことも重要であり、『飛ぶ男』のヴァリエーションの検討などにも評価すべき視点がある。何よりも、意欲的・多角的に安部の作品に論及し、自己の描くイメージを熟っぽく語る姿勢は好感の持てるものでもある。

しかし、第5章が提出論文の本章としてふさわしいか疑問であり、また第4章も論の性質上、第1から3章のようにはうまく収まり切れないと言わざるを得ない。各論文を発表順に集めていったという痕跡が残っている。

また、基本的に対比研究的アプローチで臨むとしながらも、リルケを扱った部分では影響関係調査の手法を用いるなど、それを貫ききれていない部分もある。さらに各章内において、前節での論述と符合しないのではないかと取れる箇所が散見する。リルケとの比較において、リルケ以外からの借用でないという証明がないと不十分だと思われる部分もある。オースター論に安部との対話的考察も見られない。また、現実の作家の発言への安易な寄りかかりもなしとしない。

全体として、解釈を示す時に、自己の論理にひきつけて比較対象とする作品との関連付けに性急に走るのではなく、別の解釈の可能性も視野に入れたうえで、そう判断することが最も適切であるというような手続きに腐心することが望まれる。そのことによって、本論文の説得性が増すはずである。

このように望むところも少なくなく、機会があればさらに稿を充実させることも願われるが、大きな構えそのものは十分に評価され、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。